

9 SEPTEMBER 2025

【特集】

高機能&高付加価値で成長し続ける

敏感肌市場

TOP INTERVIEW

株式会社薬王堂

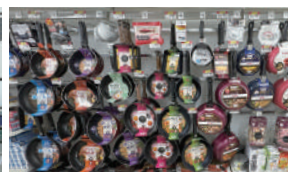
代表取締役 社長執行役員 西郷孝一氏に聞く

「5年間で売上高3,000億円、450店舗の新規出店を目指す
小売業の基本を粛々と実行することが成長戦略」

店舗レポート

薬王堂 黒磯銅掛店

「定番売場の強化&EDLPで集客
最新標準店の関東一号店」



新業態

イオンリテールのシニアケア新機軸
「MySCUE」

イベントレポート

大プレゼン大会 JEAS AWARD 2025

真の防犯マーケティングを目指して

提言企画

都市小型スーパーのまいばすけっと
“コンビニじゃない”強さの理由

今月の視点

ビューティとヘルスはオムニチャネルの親和性が高い！



大プレゼン大会 JEAS AWARD 2025

真の防犯マーケティングを目指して

6月6日(金)主婦会館プラザエフ(東京都千代田区)にて、JEAS(工業会 日本万引防止システム協会、会長 稲本義範氏)主催による、防犯システムに関する「大プレゼン大会 JEAS AWARD 2025」が開催された。大会には6社参加、1社15分の限られた時間の中、自社の防犯を中心とする自信の最新システムをプレゼン。ここでは6社のプレゼンの要点を紹介する。



あなたの動き、お店はもっと解る！ 顔認証を活用した顧客行動分析

【登壇者】日本電気株式会社 バイオメトリクス・ビジョンAI統括部
プロフェッショナル 田中 俊彦氏

店舗での困りごと、課題改善を
定量的、段階的に解決する手段なし

正確な顔分析により重複のない
「ユニーク動線分析」が実現



店舗の課題には以下のようなことがある。

売場レイアウト変更、商品陳列位置見直し、プロモーション改善などを実施する際、POSだけでは判断できない「①マーケティング活動の指標不在」。

品出し、清掃などの業務を評価する際、「②店舗スタッフの活動状況が見えない」。

レジを通らず退店する、人目のない場所に頻繁に出入りするなど「③不審行動の見分けがつかない」。

これらの課題を「NECの映像分析基盤」は改善する。

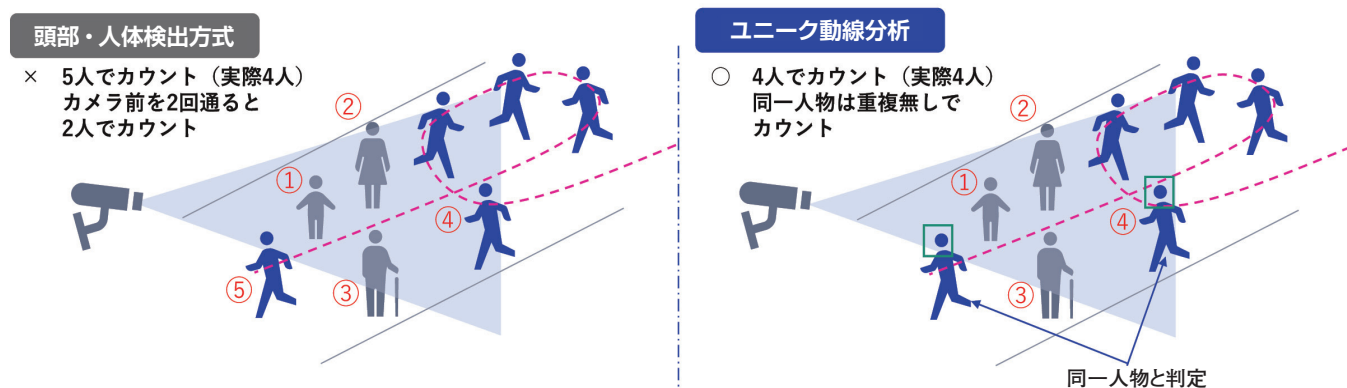
NECの映像分析基盤では、カメラの視界内に入った人物の顔が映っていない、遠すぎるなど顔識別できない段階では仮IDを付与、顔識別できた段階で本IDを付与する。同じ人物がカメラ視界内を出入りしても、このシステム(ユニーク動線分析)により重複カウントすることがない。正確な客動線を捕捉できる(図表1)。

これを活用すれば、例えば、POSデータでは売れ個数と一品単価の掛け算でしか求められない「売上」を、入店客100人のうち、売場前を何人通過したか、そのうち何人が立ち止まっ

たか、何人が商品を手に取り、何人がレジにその商品を持ち込んだか、客動線を通したデータに分解できる。これにより、数値を基にした売上改善策がとれるようになる。

同様に従業員の店内での行動、お客の不審行動を正確に把握することで、冒頭に挙げた店舗の課題解決に向けた具体的な指標が得られる。

【図表1】 NEC映像分析基盤・動画顔識別機能「ユニーク動線分析」



フルサービス型セルフレジにおける、 使いやすさとロス対策の両立

本部・店舗・お客様、全てに寄り添う
AIカメラソリューション、満を持して日本へ

【登壇者】日本NCRコマース株式会社 流通システム営業本部 グローバル営業部
松永 陽生氏



セルフレジの5つの不正(誤操作)に AIカメラが対応

松永氏はセルフレジの真上に設置した防犯カメラによる会計(スキャン)動画の録画を2台分、目視で確認した経験を持つ(1台当たり17時間×2=34時間)。

その結果一定数の不正(誤操作)を発見。いくら監視カメラがあっても不正をする人はするという認識を持った。その理由は不正をした人は録画した映像は見られることがないと思っているからである。

日本NCRのAIカメラソリューション「エバーチェック」では、AIカメラにより「商品の動き」と「バーコードのスキャン情報」をリアルタイムで照合、不一致があった場合店側に通知する。

セルフレジの不正利用は次の5つに類型化され、エバーチェックはこの全てに対応する。

- (1) スキャン回避:カゴに入れた商品をスキャンせず(スキャンしたふりをして)買物袋へ入れる。
- (2) カート下のスキャン漏れ:カートの下段に入れた商品をスキャンせず持ち去る。
- (3) カゴ抜け:カゴ、カートに入れた商品をレジを通さず持ち去る

(4) 会計未終了:すべての商品をスキャンするが会計せずにそのまま持ち去る。

(5) バーコード偽装:高価格商品(例／高級ウイスキー)のバーコードの上に低価格商品(例／ミントタブレット)のバーコードをかぶせて低価格商品をスキャンする。

悪意のないセルフレジの 誤操作にも対応

スキャンの誤操作は不正ロス(万引き)もあるが、悪意のない単なる操作ミスも含まれている。これがセルフレジの難しいところで、エバーチェックはこれに配慮したサービスとなっている。

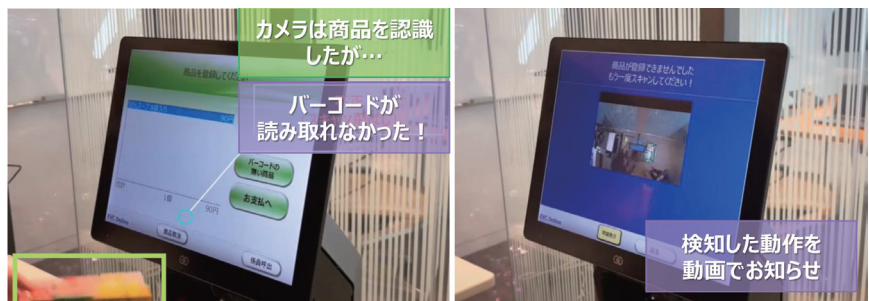
エバーチェックにより、スキャン回避

が検知されると、リプレー動画がセルフレジのモニターに流れどの商品がスキャンされていないかをお客に示す。これに対応してその商品を改めてスキャンすれば通常の会計ができる。同じ会計で2回以上未スキャンを検知すると従業員に通知、従業員が駆けつける仕組みになっている(ナッジ機能)。1回の単純ミスを不正とみなさない機能だ。

また、動画を利用するので利用者の顔、暗証番号などを入力する決済端末にはマスキングするなど個人情報の保護(データガバナンス)への配慮もある。

単純ミスによりお客、従業員ともに不快な思いをすることを回避する工夫があり、省力化、顧客満足、ロス対策を実現させる。同社ではこのシステムを「新時代のロス対策」と位置づけている。

AIカメラとスキャナーが連動



AIカメラによる商品の動きとバーコードスキャナーの読み取りデータをリアルタイムで照合。何らかの不一致があればレジのモニターに通知とリプレー動画が流れる

AI搭載防犯カメラで人数カウント

【登壇者】株式会社GeoVision 企画商品部 豊田 孝志氏

AIカメラ単体で人数カウント 正確で経済的なシステム

AI人数カウントカメラは、防犯やマーケティングでも基本となる「人数(来店客数)」をカメラ映像を使ってカウントするシステム(来店者カウントシステム)。

GeoVision社が提供している人数カウントシステムには「カメラ+AIソフト」、「AIカメラ+集計ソフト」「AIカメラ単

体」の3種類がある。今回紹介するのはAIカメラ単体。

AIを搭載しているので、センサー式より正確に人間を判断でき、人間の向きを識別することで入店客か退店客かを見分けられる。

AIカメラ単体のカウントシステムは、入口カメラを変更するだけなので新規導入のコストが低く済み、既に別の人数カウントシステムを導入している場



合、人数カウントシステムの専用機器が不要なので運用コストが削減できる。経済的なメリットもこのシステムの特徴である。



AI映像解析技術を利用した 「万引き行動検知システム」veesion(ビージョン)

万引きは止まらない、見つけ出さない限りは

【登壇者】 高千穂交易株式会社 ビジネスセキュリティ事業本部
マーケティング戦略推進部 佐久間 博之氏

AIによる600万映像の解析で 「万引き行動」を検知

ビージョンはカメラ映像をAIで分析、体の部位ごとに行動を分析し、「①商品を棚から取る」「②取った商品をポケットや服に隠す、または自身のバッグに入れる」この2つの行動を検知したときにアラートを発信する。

既存の防犯カメラでも店舗に専用サーバ(ビージョンサーバ)を設置して、それをビージョンのクラウドサーバに接続することで利用可能。

ビージョンを開発したのはフランス企業で、現在55カ国、6,000店舗で利用されている。開発に際しては600万の映像データをAIで解析、「万引き行動10のパターン」を見つけ出し、上記で示した万引き行動の検知に生かしている。

また、日々世界中から集まる映像を機械学習することで精度を上げ、四半期に一度アプリのプログラムを更新して、ユーザーは常に最新のアプリを利用できる。

万引き常習者を発見することで 店舗のロス率を下げる

ビージョンの利用手順は以下のようになる。まず、万引き行動の疑いがある人が映った場合、アラートが出て、その映像が店側がアプリをインストールしたデバイス(スマホ、タブレット、PC)に届く。それを担当者(店長)が目視で万引きかどうかを判断し「はい」「いいえ」で入力(画像1)。この判断もAIが学習してアラートの精度を上げるのに役立つ。

店側のやることはここまで。その後の対応は企業により異なるが、この後実例を紹介するあるドラッグストア(DgS)企業では、アラートが出ると①店舗従業員が売場を見てカゴに入っているかを確認、②店長が万引きかどうかを判定、③最終判断はエリア長、本部担当者もサポートして1ヵ月ごとに確定してその映像を専用フォルダへバックアップしていく。

④常習者、万引きされた商品、手口、場所への対応(注意喚起、空箱陳列など)、⑤常習者が再来店した場合「いらっしゃいませ」などの声掛けで未然防

止、大量窃盗犯、悪質な万引き犯には警察機関に連絡し駆けつけを要請する。

売場や立地が同等の店舗間でロス率が大きく異なる場合、常習者の存在が大きく、ビージョンのシステムは万引き常習者を発見することに適している。

これを見出し対応することで店舗のロス率を下げる役割を果たす。

導入企業では3日に1回 万引きを発見

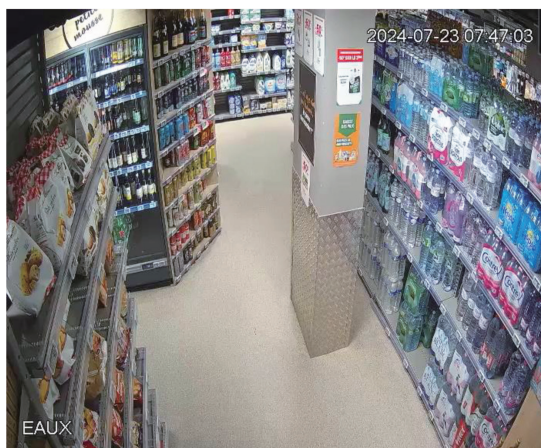
あるDgSの導入実例では、45日間の検証期間の中で、当初2週間はシステムの調整、補正期間となり、その後、アラート発信は1日平均7.6回(9台のカメラが作動)、そのうち万引きと判断された確率は3.9%だった。計算では3日に1回程度で万引きが見つかることになる。

データは曜日別、時間別などにグラフ化できて、視覚的に万引きの発生状況を把握して対策を立てられる。

ロス率は常習者により上がる傾向があり、これを特定して対策するためにビージョンを活用してほしいと佐久間氏は結んでいる。



〔画像1〕 ビージョンのアラートシステム



万引き行動と思われる映像を検知するとアプリに通知と映像が届く



母親の孤独死を契機に 見守りシステムの開発を始める

大阪府出身の藤本氏は大学卒業後、ゲーム会社に就職。大手警備会社に転職後、働きながら海外の大学でMBA取得(University of Wales)、その後筑波大学大学院博士課程に入学しシステム情報工学を学ぶ。

藤本氏は单身生活する自身の母親が孤独死したことを契機に、当時順調だった仕事をすべて辞め心機一転、見守りのためのシステムを開発する企業、セキュアリンクを立ち上げた(母親の第一発見者は近隣住人から連絡を受け実家に駆けつけた藤本氏だった)。

基本となる技術は「Wi-Fi AIセンシング」。インターネット通信で使うWi-Fiが発信する電波には、人や物の動きを感じると揺らぎが生じる特性がある。水面に石を落とすとと波紋が立つのと同様の原

身近な他人が見守る社会の創造

Care Sense(ケアセンス)とWave Sense(ウェーブセンス)

【登壇者】セキュアリンク株式会社 代表取締役 藤本 典志氏

理だ。揺らぎを検知してそのデータをAI解析により、どのような動きがあったかを検知・予測するのが「Wi-Fi AIセンシング」。これを利用して、現在「ケアセンス」と「ウェーブセンス」という2つのサービスを提供している。

カメラを使用せず微細な動きまで検知できるので個人情報保護しながら詳細なデータが取れる。また、既存のWi-Fi回線を利用するので設置工事なども不要、安価で利用できるのも特徴である。

個人的な経験と使命感から、現在見守りを目的に事業展開しているが、藤本氏によれば、同じシステムで防犯にも高い効果をもたらすことには自信があり、資金的な条件が整えばその領域へも進出したいとしている。

室内での活動や眠りなどを Wi-Fiが電波の揺らぎで検知

ケアセンスは独居高齢者を対象にした見守りシステム。Wi-Fi AIセンシングが、「活動」「眠り」「呼吸」の3つを検知して記録。活動では活動量、在室、離室

などを検知。眠りではまぶたの動きからレム睡眠(浅い眠り)とノンレム睡眠(深い眠り)を検知し睡眠評価も可能。

呼吸では呼吸数や呼吸リズムを検知する。単身高齢者の住まいや施設などでの利用を想定している。

高額な防犯システムに代替しうる ウェーブセンスの検知機能

ウェーブセンスは軽度な見守りと防犯を目的としたサービス。高齢者の住む住宅、一般住宅、事務所、倉庫、店舗などに適している。Wi-Fi AIセンシングにより、カメラでは死角になりやすい、トイレ、浴室などの動きも検知する。見守りが得意な「ケアモード」、警備が得意な「セットモード」など複数のモードが選べる。

正確性の高いシステムで、高額なセキュリティサービスと同等な効果が得られる。

一人暮らし世帯は増加傾向にある。藤本氏は自信の体験から、今後は「身近な他人が見守る社会を創造」することが重要で、自社の技術をこれに役立てたいと語る。

お客様の安心と売上の安定を両立する万引き対策

防犯対策の最適解、店員様の負担が軽く 投資対効果の高いシステムとは

【登壇者】タカヤ株式会社 RF事業部 第二営業部 中山 真一氏

防犯はできるだけ簡単に 確実に

今回5つの商品が紹介された。1つ目は「HAWK-GRIP FIVE」(ホークグリップファイブ)。箱状の商品の防犯に適しており、以下の5つのケースでアラームが鳴る。1.商品に設置したワイヤーの切断、2.防犯ゲートに近づく、3.防犯ゲートが発報する、4.箱を壊すなどして中身だけ取り出そうとする、5.専用機器を使わずに解除しようとする。このように広範なケースを想定、電池交換可能なので半

永久的に使える。

2つ目は「HAWK-GRIP FIVE COM」。これはHAWK GRIP FIVEをコンパクトにした製品で、高額なワイヤレスイヤホンなど形状が小さく高額な商品に適している。

3つ目は「ITS-BOX」。この製品は、売場の音に反応して発報を検知する。売場の広いホームセンターなどで死角にある商品のタグが外されたときタグのアラームに反応して大音量化(増幅)させ、店舗従業員の発見に役立てる。

4つ目は「Wi-dimo(ワイディモ)」。

半径2.5m～4.5mのエリア外にWi-dimoを付けた商

品を持ち出すとアラームが鳴る仕組み。ワイヤーなどを気にせず、商品を手にとって見ることができる。

5つ目は「Air-C」。これは天井に箱状のアンテナを設置して、防犯ゲートと同じように、アンテナの設置したエリアを通り抜けようするとアラームが鳴る。

これらの製品は多くの小売業で導入され、売上の安定と防犯を両立させている。

